

仙台市文化財調査報告書第174集

安久東遺跡

—第3次発掘調査報告書—

1993年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第174集

あん きゅう ひがし
安 久 東 遺 跡

—第3次発掘調査報告書—

1993年3月

仙 台 市 教 育 委 員 会

序

仙台市の南部に位置する西中田地区は、以前は近郊農業地帯として推移してまいりました。今は区画整理事業の実施後徐々に市街化が進み、仙台のベッドタウンとして新しく生まれ変わりつつあるところであります。

安久東遺跡はこのような地域の中心部にあり、過去に行われた数次の発掘調査では古墳時代の方形周溝墓や古墳、古代の集落跡をはじめとして中・近世の屋敷跡も発見されており、古くから人々が生活を営んでいた重要な地域であることが判っています。

当遺跡の発掘調査も仙台市教育委員会が実施したものでは今回で第3次を数えます。今回の調査では残念ながら多くの成果をあげるには至りませんでしたが、必ずや今後の調査につながっていくものと考えます。

今後とも仙台市の文化財保護につきましては御協力、御理解をいただきたくお願い申し上げます。

なお最後になりましたが、調査にあたって御協力いただきました皆様には心から感謝申し上げます。

平成5年3月

仙台市教育委員会

教育長 東海林 恒英

例　　言

1. 本書は共同住宅建設に伴う安久東遺跡の第3次発掘調査報告書である。
2. 本書の作成にあたっての整理および執筆・編集は平間亮輔が担当した。
3. 本書に収録した記録、遺物は仙台市教育委員会が保管している。

凡　　例

1. 土色については「新版標準土色帳」(小山・竹原:1973)を使用した。
2. 國中の北は磁北を示す。
3. 第1図は国土地理院昭和48年発行の土地条件図2万5千分の1「仙台」を再トレース、一部改変したものである。
4. 第2図として掲載した地形図は国土地理院5万分の1「仙台」を使用した。
5. 表2の安久東遺跡調査次数における「所在地」は現在の住所表示に基づいたものであり、調査時のそれとは異なっている。
6. 第12図の安久東遺跡遺構全体図は『安久東遺跡現地説明会資料』仙台市教育委員会(1977)の原図を基本にして、「安久東遺跡」「東北新幹線関係遺跡調査報告書IV」宮城県教育委員会(1980)、『安久東遺跡発掘調査概報』仙台市教育委員会(1976)、『宮城県仙台市安久東遺跡』埋蔵文化財発掘調査研究所(1986)の各報告書掲載図を合成・再トレースしたものである。

本文 目 次

第1章 はじめに.....	1
I. 調査の概要.....	1
1. 調査に至る経過.....	1
2. 調査要項.....	1
II. 遺跡の立地と環境.....	1
III. 調査方法.....	4
1. 安久東遺跡の調査次数について.....	4
2. 調査方法.....	4
IV. 基本層序.....	6
1. 基本層序.....	6
2. 他調査区との層の対応関係.....	8
第2章 調査結果.....	10
I. 検出遺構.....	10
1. 上層の遺構.....	10
2. 下層の調査.....	10
II. 出土遺物.....	12
第3章 まとめ.....	13

挿 図 目 次

第1図 遺跡周辺の地形	2	第7図 調査区設定図	9
第2図 周辺の主な遺跡	3	第8図 調査区西壁セクション図(1)	10
第3図 遺跡全体図	5	第9図 周辺の遺構配置図	11
第4図 基本層序(1)	6	第10図 調査区西壁セクション図(2)	11
第5図 基本層序(2)	7	第11図 出土遺物	12
第6図 基本層序柱状図	8	第12図 安久東遺跡遺構全体図	15・16

挿 表 目 次

表1 周辺の主な遺跡地名表	3	表3 基本層序観察表	7
表2 安久東遺跡調査次数表	4		

写 真 図 版 目 次

写真1 安久東遺跡航空写真	18	写真6 調査風景	21
写真2 調査区西壁セクション	19	写真7 調査風景	21
写真3 調査区西壁セクション	19	写真8 調査区全景	22
写真4 深掘区東壁セクション	20	写真9 碓層上面の状況	22
写真5 調査風景	20	写真10 出土遺物	23

第1章 はじめに

I. 調査の概要

1. 調査に至る経過

平成2年7月、安久東遺跡内における共同住宅建設に伴って発掘通知が提出された。このため、仙台市教育委員会は原因者である仙台土地開発株式会社との協議の結果、記録保存のため発掘調査を実施することとした。

2. 調査要項

遺跡名 安久東遺跡（あんきゅうとういせき）

所在地 仙台市太白区西中田4丁目3-2

調査目的 共同住宅建設に伴う事前調査

調査面積 約160m²

調査期間 平成4年4月17日～4月28日

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育委員会文化財課

担当職員 平間亮輔

調査協力 仙台土地開発株式会社

調査参加者 赤井沢千代子 大友 鶴雄 小畠 和子 沢木 茂

関根 清藏 寺崎 光子 永沢 幸枝 山田 沢子

整理参加者 大槻 明美 佐藤とき子 佐竹さく子

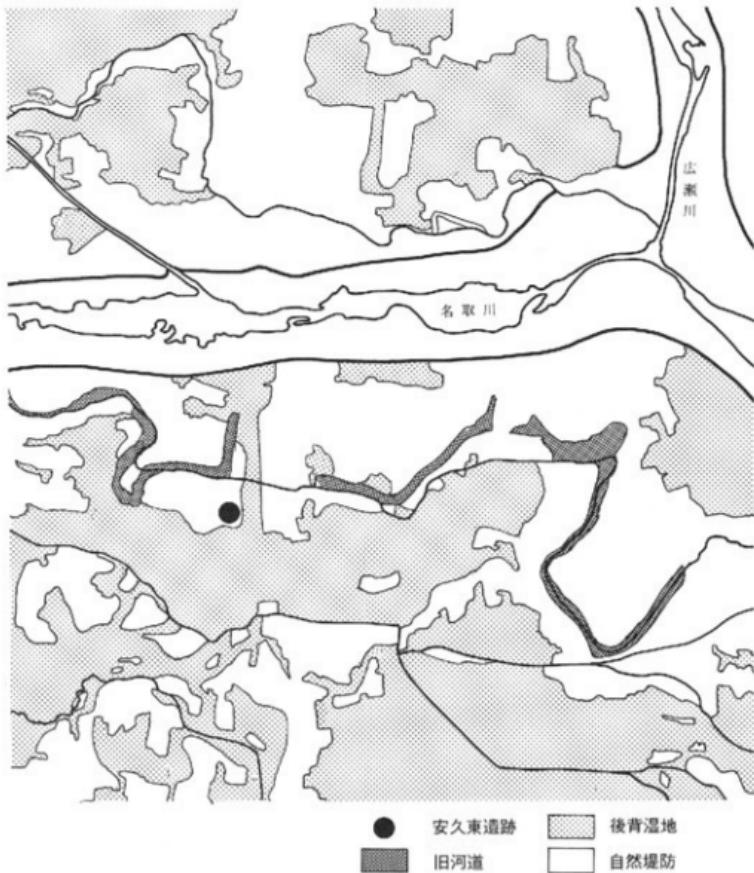
II. 遺跡の立地と環境

安久東遺跡は仙台市太白区西中田1・3・4・5丁目に位置する。名取川と広瀬川との合流点から約2.5km上流側、名取川からは南方約0.8kmの地点である。現在、遺跡付近は土地区画整理事業に伴う盛土がなされており、旧地形を見ることはできないが、名取川の旧河道とそれによって形成された自然堤防や後背湿地が複雑に入り組んだ地形となっており、当遺跡は丁度自然堤防の端部に立地している（第1図）。

名取川流域には遺跡が数多く分布しているが、この周辺は特にその密度が濃い。第2図は主要な遺跡のみを抜き出したものであるが、北岸部では富沢遺跡や六反田遺跡をはじめとして旧

石器時代や縄文時代から続く遺跡が認められるのに対し、名取川南岸部においては縄文時代の遺跡は少なく、本遺跡の周辺は弥生時代以降になって人々の活動が活発化したことが知られる。

南岸部の主な集落跡としては古墳時代後期の栗遺跡、古墳～平安時代の清水遺跡・中田南遺跡などがあり、自然堤防上にムラが散在していた様子が窺われる。中世になると当遺跡をはじめとして前田館跡や中田南遺跡、北岸部では富沢館跡や大野塙遺跡などに武士階級の居館と考えられる屋敷跡があり、名取川の存在をも考慮すると中世期においては重要な地域であったと言える。



第1図 遺跡周辺の地形 (1/30000)



第2図 周辺の主な遺跡 (1/50000)

No.	道跡名	種別	立地	年代	No.	道跡名	種別	立地	年代
1	上野道跡	包合地	段丘	繩文・奈良・平安	7	下ノ内酒道跡	集落跡	自然侵蝕	劉文～平安
2	三神峯道跡	集落跡	段丘	繩文	8	六沢田道跡	集落跡	自然侵蝕	劉文～平安
3	富沢道跡	蛇跡	自然侵蝕～後背高地	中世	9	大野櫻道跡	細跡地	自然侵蝕～後背高地	劉文～中世
4	下ノ内酒道跡	集落跡	自然侵蝕	繩文・弥生・平安	10	西台山道跡	包合地	自然侵蝕	弥生・古墳
5	山口道跡	集落跡・水田跡	自然侵蝕～後背高地	劉文～中世	11	郡山山道跡	官衙跡・水田跡地	自然侵蝕～後背高地	弥生～奈良
6	富沢道跡	水田跡地	洪積地	石器～近世	12	北日城跡	城跡地	自然侵蝕	室町・江戸
13	安久東道跡	集落・緩地	自然侵蝕	弥生～近世	23	相高道跡	包合地	自然侵蝕	弥生～平安
14	安久道跡	集落跡	自然侵蝕	奈良～平安	24	瀬水道跡	集落跡	自然侵蝕	弥生～中世
15	篠道跡	集落跡	自然侵蝕	弥生～平安	25	前田原跡	緩地	自然侵蝕	奈良～平安
16	中田神社道跡	包合地	自然侵蝕	古墳・平安	26	中田北道跡	包合地	自然侵蝕	奈良～平安
17	開帝道跡	包合地	自然侵蝕	古墳～平安	27	中田南道跡	集落・鉄跡	自然侵蝕	弥生～中世
18	松木道跡	集落跡	自然侵蝕	平安～近世	28	上余田道跡	集落跡	自然侵蝕	弥生～平安
19	高畠道跡	包合地	冲積平野	弥生～平安	29	後河原道跡	水田跡	自然侵蝕	奈良～平安
20	鹿野東道跡	包合地	段丘	劉文～平安	30	中田町中道跡	集落跡	自然侵蝕	奈良～平安
21	川上道跡	包合地	段丘	劉文～平安	31	戸ノ内道跡	集落跡	自然侵蝕	古墳・平安・中世
22	今船野道跡	田舎・集落	段丘	劉文～平安	32	下余田道跡	集落跡	自然侵蝕	古墳～平安

表1 周辺の主な遺跡地名表

III. 調査方法

1. 安久東遺跡の調査次数について

当遺跡においては、過去に仙台市教育委員会が行った数地点の調査の他、県教育委員会や民間の調査団による調査も行われている。そこで今後の混乱を避けるため、仙台市教育委員会が実施した調査には独自の調査次数を付け、他機関の調査は次数外として区別することとした(第3図、表2)。なお、これらの調査のうち第2次調査は複数地点の調査であるが、一連のものであるので同一の次数とし、調査区にA～G区の名称を付けて区別した。今回の調査は第3次調査に当たる。

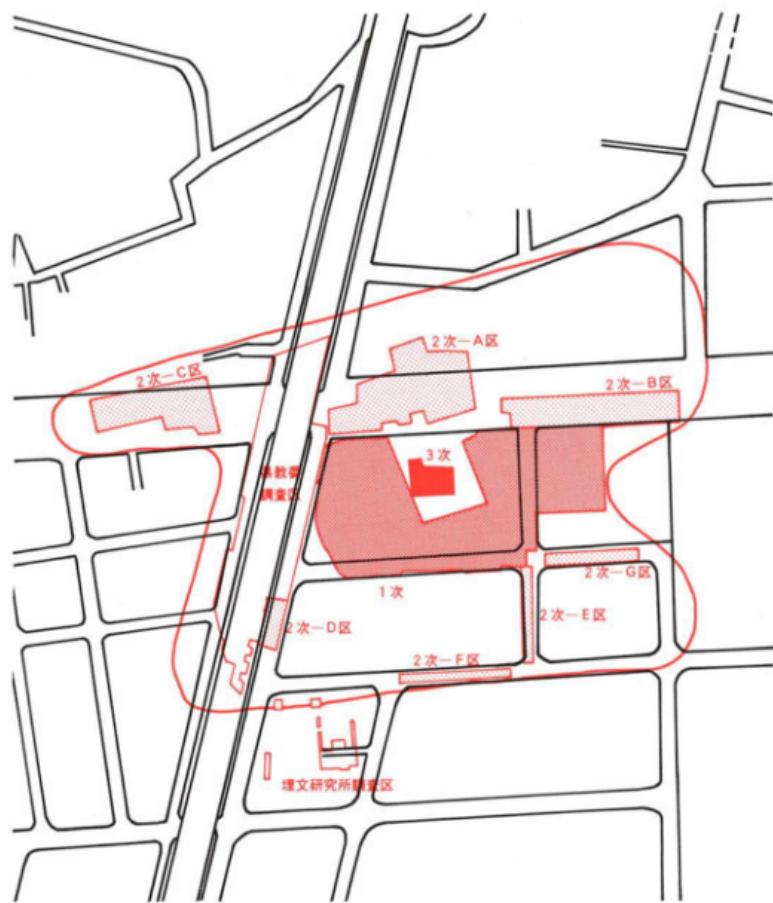
2. 調査方法

調査は盛土と旧表土を重機で除去し、その後人力による調査を行う予定であったが、重機による掘削の途中で直下に大規模な攢乱がなされていることが判明した。攢乱は調査区のほぼ全面にわたっており、深いところでは現地表から約5m下にまで達していたため、存在が予想される遺構は完全に破壊されていると考えられた。このため、調査の主目的を調査区の断面観察と下層の調査に切り替えている。

なお、当初の調査面積は約160m²であるが下層の調査に伴って面積を順次縮小したため、最終面は約1m²である。

調査次数	所在地	調査年	調査面積	調査原因	主な遺構	調査主体
第1次	太白区西中田四丁目 2・3番地	1975～1976	約4000m ²	土地造成 整理事業	孤立柱建物跡、廐穴住居跡、溝跡、井戸跡、古墳(石室)	仙台市教育委員会
第2次	A区 太白区西中田一・西丁目 (県道沿い、仙台駅)	1977	約1047m ²	土地造成 整理事業	廐穴住居跡、溝跡	仙台市教育委員会
	B区 太白区西中田四丁目 (県道沿い、仙台駅)		約602m ²		溝跡	
	C区 太白区西中田二・五丁目 (黒瀬沼沿、仙台駅)		約565m ²		廐穴住居跡、溝跡	
	D区 太白区西中田四丁目 (街路)		約155m ²		廐穴住居跡、溝跡、井戸跡	
	E区 F区 G区		約138m ² 約141m ² 約138m ²		孤立柱建物跡、溝跡、井戸跡 溝跡 孤立柱建物跡、溝跡、土坑	
次数外(1)	太白区西中田一・三・四・五丁目	1972, 1976, 1977	約2639m ²	東北新幹線 建設事業	廐穴住居跡、方形周溝墓、古墳(石室)、溝跡	宮城県教育委員会
次数外(2)	太白区西中田四丁目7番地	1985	約142m ²	土地造成 工事	門跡、追跡跡、溝跡	地域文化財 発掘調査研究所

表2 安久東遺跡調査次数表



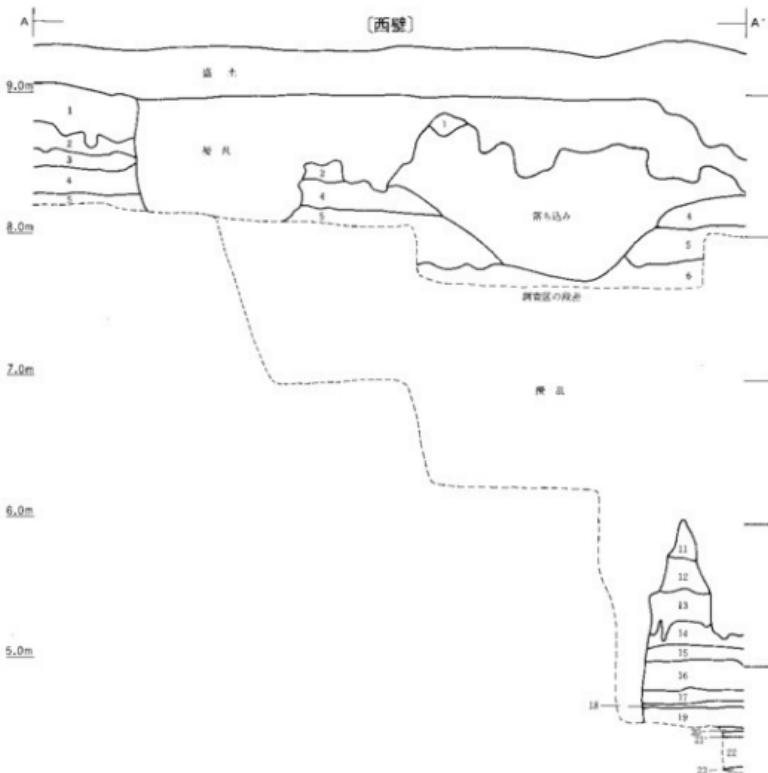
第3図 遺跡全体図 (1/2000)

IV. 基本層序

I. 基本層序

盛土下には1～25層まで認められたが、擾乱範囲が広いため各層の広がりや傾斜の有無は不明である。また、6層と7層との間にさらに別の層が存在する可能性もある。

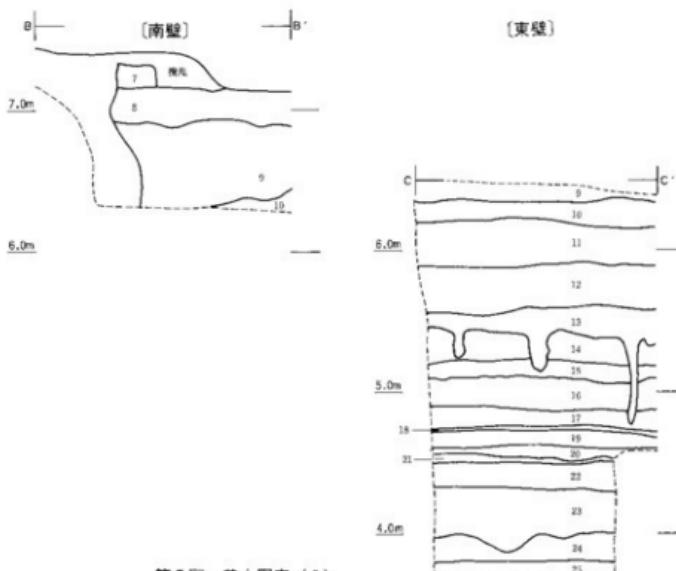
各層を大別すると1～3層がシルトで、4～6層が粘土である。7～19層はシルトを主とするが、間に粘土層や砂層が介在する。その下の20～24層までは粘土で、25層が砂礫層である(第4・5・7図、表3)。



第4図 基本層序 (1)

層序	色 調	性 質	混 入 物 * その 他
1	16YR 3/3 黒褐色	シルト	山耕作土
2	16YR 3/4 黒褐色	シルト	炭化物粒少量
3	16YR 3/2 黒褐色	シルト	斑文状の酸化鉄少量
4	16YR 4/4 黒	シルト質粘土	酸化鉄粒若干
5	10YR 5/3 にほい黄褐色	粘土	酸化鉄粒少量、マンガン粒多量
6	10YR 4/4 黒	粘土	2.5Y 3/3 單オリーブ褐色粘土ブロック少量、マンガン粒多量
7	10YR 4/3 にほい黄褐色	シルト	酸化鉄粒少量・マンガン粒多量
8	10YR 3/2 黒褐色	粘土	斑文状の酸化鉄少量、砂粒多量
9	2.5Y 5/3 黄褐色	シルト質砂	質状の酸化鉄少量
10	2.5Y 5/2 黄褐色	粘土	質状の酸化鉄少量、マンガン粒少量
11	2.5Y 4/4 オリーブ褐色	細砂	質状の酸化鉄少量
12	2.5Y 5/3 黄褐色	シルト	質状の酸化鉄少量
13	2.5Y 4/2 暗灰褐色	シルト質粘土	質状の酸化鉄少量、マンガン粒ごく少量
14	7.5Y 4/1 灰	シルト質粘土	質状の酸化鉄少量、マンガン粒ごく少量
15	7.5Y 3/1 オリーブ黒	粘土	質状の酸化鉄少量、マンガン粒ごく少量
16	10Y 4/1 灰	シルト	質状の酸化鉄少量、マンガン粒ごく少量
17	10Y 3/1 オリーブ黒	シルト	
18	10Y 3/1 オリーブ黒	粘土質シルト	
19	10Y 4/1 灰	シルト	
20	10Y 3/1 オリーブ黒	粘土	部分的に非常に硬い
21	7.5Y 3/1 オリーブ黒	粘土	
22	7.5Y 2/1 黒	粘土	植物遺体ごく少量
23	7.5Y 3/1 オリーブ黒	粘土	
24	7.5Y 3/2 オリーブ黒	粘土	砂粒多量、φ 5~10 mm の小礫少量
25	—	砂礫	表面は崩れやすい。φ 30~50 mm 程度のものが多い。

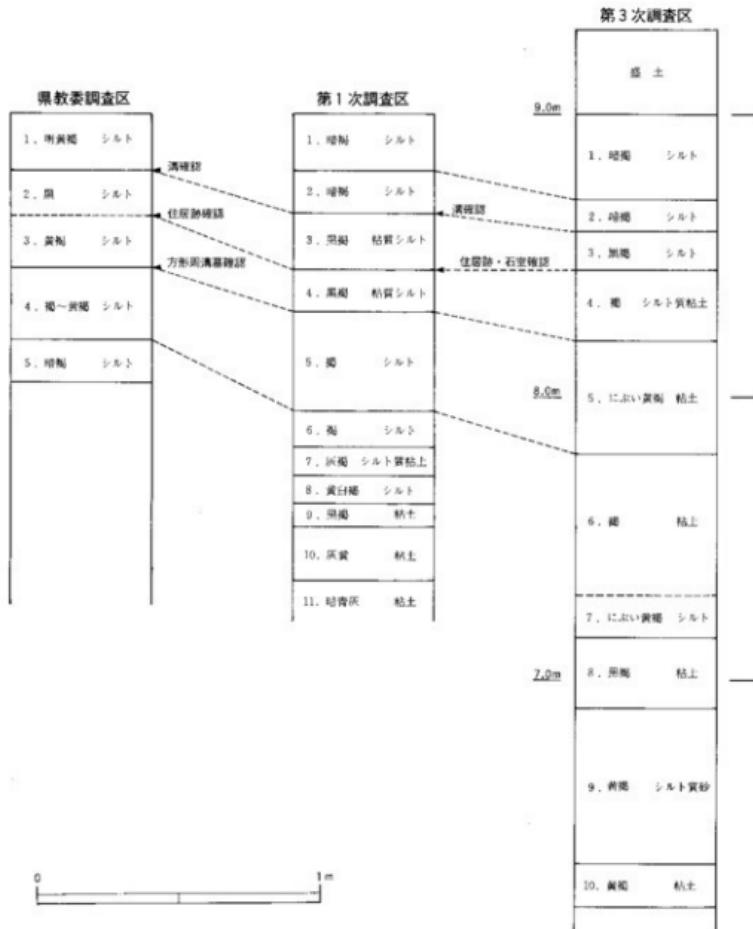
表3 基本層序観察表



第5図 基本層序 (2)

2. 他調査区との層の対応関係

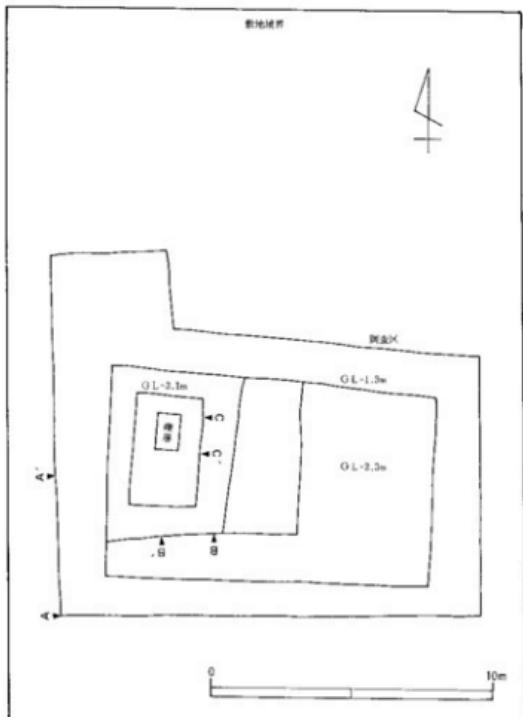
第6図は県教育委員会調査区・第1次調査区・第3次調査区における基本層序の柱状図である。県教育委員会調査区と第1次調査区は層の標高が不明なため、図中では便宜的に旧表土上面を同一レベルに合わせた。



第6図 基本層序柱状図

各調査区によって層の色調・性質が少しずつ異なるが、県教育委員会調査区と第1次調査区においては各時代の遺構がほぼ層位的に確認されているので、これに基づいて層の対応を試みることが可能であると考える。

両調査区では暗褐色の表土層下に黒色系のシルト質の層があり、この上面で中・近世の溝跡を確認している。この下では色調は異なるが、黄褐色あるいは黒褐色のシルト質の層上面で平安時代の竪穴住居跡や古墳の石室が確認され、さらにその下の褐～黄褐色のシルト層上面では古墳時代前期の方形周溝墓が確認されている。これらの結果を当調査区と対応させれば第7図の破線で示したようになり、本来は当調査区3層上面が中世遺構の確認面、4層上面が奈良～平安時代頃の遺構確認面、5層上面が古墳時代前期の遺構確認面であったと推定される。



第7図 調査区設定図

第2章 調査結果

I. 検出遺構

1. 上層の遺構

調査区全面に擾乱が及んでいるため平面的に確認できた遺構はないが、調査区西壁で幅（あるいは径）2m程の落ち込みの断面を確認した（第8図）。擾乱のため掘り込み面は不明であるが、遺存している堆積土のレベルから推定するとほぼ2層上面から掘り込まれたものと考えられる。堆積土は単層（暗褐色シルト）である。

この落ち込みを確認した調査区西壁は第1次調査区と近接しているが、第1次調査区の遺構配置からみて当調査区に延びる可能性のある遺構は3号溝のみである（第9図）。この3号溝は中・近世の範疇の区画に關係すると考えられるが、基本層序の項で述べたように確認面は当調査区の3層に対応する面で、堆積土も当調査区で確認した落ち込みのように単層ではない。これらのことから今回確認した落ち込みは第1次調査区の3号溝の続きではなく、より新しい時期の遺構であり、周辺の状況からして土坑の可能性が高いと考えられる。

なお、第1次調査区の3号溝をそのまま東に延長すると当調査区では第8図の★印付近を通過するが、この地点の擾乱の幅・深さからしてこの場所に3号溝が存在したと考えても矛盾はないと考えられる。

2. 下層の調査

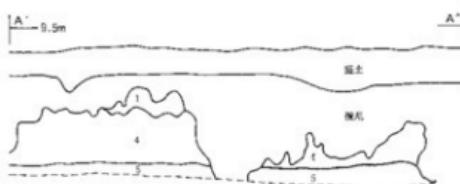
調査区の西半部に約4×6mの深掘区を設定し、重機で地表下約3mまで掘り下げたが、この時点においてもまだ擾乱が大部分であった。ここから下層は調査区を順次縮小しながら人力によって掘り下げたが、結果的に擾乱の一部は地表下約5m下にまで達しており、下層の遺構の有無を平面的に調査することはできず、擾乱土中から若干の遺物を採集するに留まった。なお、



第8図 調査区西壁セクション（1）



第9図 周辺の遺構配置図



第10図 調査区西壁セクション（2）

調査は地表下約5.5m（標高3.8m）で疊層に達した時点で終了している。

II. 出土遺物

遺物は破片が19点で、すべて攤乱中から出土した。このうち現代のものを除いた内訳は土師器6点、陶器1点のみである。

1. 土師器（第10図1～3、写真10-1～3）

図化できたのは3点である。すべてロクロ調整の甕であるが、このうち2と3は同一個体の可能性が高い。また図化はできなかったが2・3と同一個体と考えられる体部中位の破片があり、これには成形時のタタキ目が認められた。

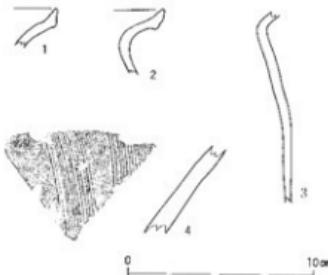
これらは平安時代の所産と推定されるが、点数や出土状況に制限があるため具体的な年代については言及できない。

2. 陶器（第10図4、写真10-4）

擂鉢の体部破片で、内・外面に鉄軸が掛かる。内面には6本一組の筋目が認められ、筋目の各単位間は比較的間隔が開いている。産地は確定できないが、ほぼ17世紀代の所産と考えられる。

3. その他

上記の土器片の他に径4cm前後と15cm前後の礫（河原石）を約30個採取した。断定はできないが周辺の調査区で検出されているような河原石積みの小規模な石室が存在していた可能性も考えられる。



No.	写真同版	層位	種別	器種	遺存産	色調	特徴
1	10-1	攤乱	土師器	甕	口縁小片	褐	ロクロ調整
2	10-2	攤乱	土師器	甕	口縁小片	褐	ロクロ調整、No.3と同一個体か？、タタキ成形か？
3	10-3	攤乱	土師器	甕	体部上半1/10	褐	ロクロ調整（内面のロクロ目が顯著）、タタキ成形か？
4	10-4	攤乱	陶器	擂鉢	体部小片	褐褐	内外面共鉄軸、内面に筋目（6本一组）

第11図 出土遺物

第3章 まとめ

1. 今回の調査では残念ながら遺構を確認することはできなかったが、わずかに残存していた調査区西壁面の検討の結果、消極的な理由ながらも第1次調査区の3号溝はそのまま東に延びる可能性が高いことが検証できた。
2. 第1次調査では中・近世の溝の堆積土中に大量の河原石が土器とともに発見されており、かつて存在した小規模な石室が中・近世期に破壊された可能性が考えられている。今回の調査でも掘乱土中から河原石を採取することで小石室の存在を予想したが、あるいは第1次調査と同様の状況も考えられる。
3. 安久東遺跡では、仙台市教育委員会の行った調査の他にも他機関のものを含めると過去に計4次の発掘調査が実施されている。ここではその詳細については触れないが、各調査区をまとめた遺構配置を第12図に示す。各調査結果を総合した遺跡の概略については以下の通りである。
 - (1) 弥生時代以前
県教育委員会の調査で弥生土器が出土している。遺構が確認されていないため詳細は不明であるが、遺跡の年代は確実に弥生時代までは溯る。なお、それ以前の状況については不明確な点が多い。
 - (2) 古墳時代
古墳時代前期の堅穴住居跡3軒と方形周溝墓1基（図中濃いアミ点で表示）が確認されているが、堅穴住居跡は遺跡東部、方形周溝墓は西部に位置することから、居住域と墓域とが区別されていたことが考えられる。
その後、古墳時代を通して遺構は希薄になるようであるが、終末期になると河原石積みの小型石室を持つ古墳が造られたようである。小石室は5基確認されており、報文では大体8～9世紀頃の築造と推定しているが、実年代については鉄刀の年代観や石室の構造、横穴墓との関係などから再検討する必要性が感じられる。
 - (3) 平安時代
堅穴住居跡が10数棟（図中薄いアミ点で表示）確認されている。同時に存在したものは少なく、住居が散在する様相であったと考えられる。

(4) 中・近世

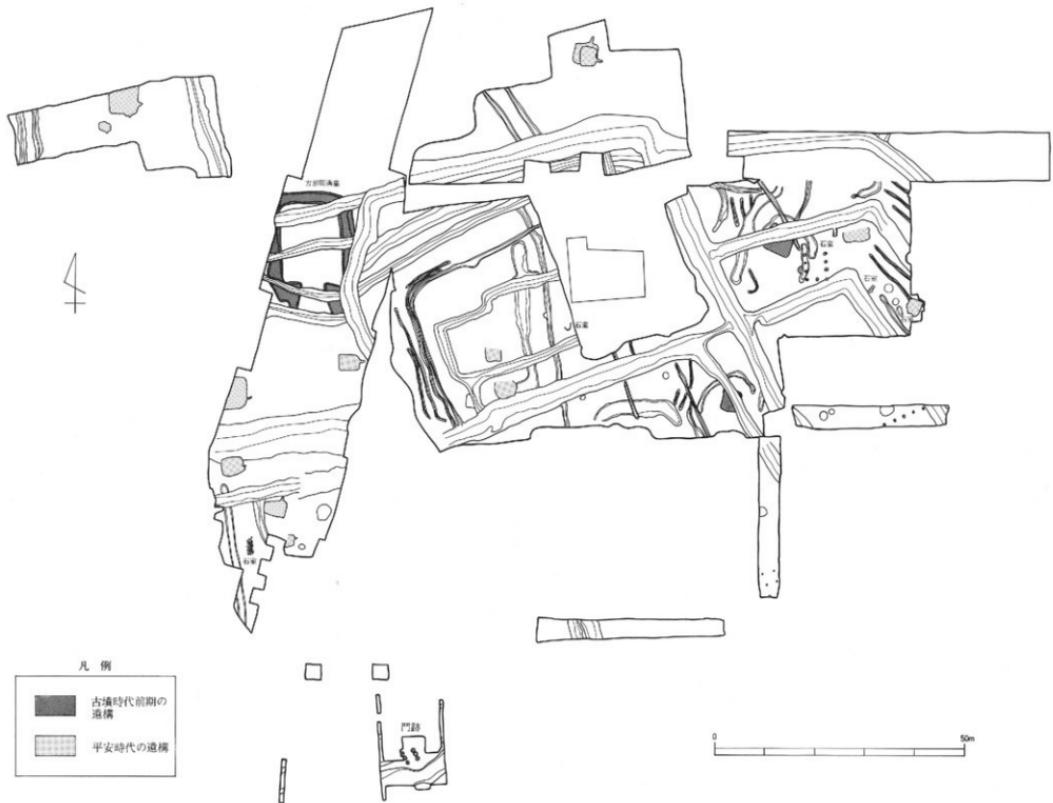
多数の溝跡が確認されており、館跡の周囲や内部を区画するものと推定されている。溝跡の切り合い関係から数期の変遷が考えられるが、各期における館跡の規模など不明確な点が多い。ただ、埋蔵文化財発掘調査研究所の行った調査では東西に走る溝とその北側に門跡と推定される遺構が確認されているので、この溝が新しい時期の館跡の南辺を区画する溝である可能性も考えられる。

註

1. 第1次調査区の古墳石室については1号墳がその構造から7世紀後半頃、2～4号墳が出土遺物から9世紀頃とされ、県教育委員会調査区の古墳はその構造から8世紀と推定されている。

引用・参考文献

1. 岩瀬康治・田中則和 「安久東遺跡発掘調査概報」仙台市文化財調査報告書第10集 仙台市教育委員会 1976
2. 仙台市教育委員会「安久東遺跡現地説明会資料」 1977
3. 土岐山武 「安久東遺跡」「東北新幹線関係遺跡調査報告書IV」宮城県文化財調査報告書 第72集 宮城県教育委員会 1980
4. 福島雅儀 「七軒横穴群」矢吹町文化財調査報告第6集 矢吹町教育委員会 1983
5. 佐々木和博 「鹿島遺跡・竹之内遺跡」宮城県文化財調査報告書第101集 宮城県教育委員会 1984
6. 加藤孝他 「宮城県仙台市安久東遺跡」埋蔵文化財発掘調査研究所報告書第2集 埋蔵文化財発掘調査研究所 1986
7. 仙台市教育委員会「中田南遺跡現地説明会資料」 1992
8. 福島雅儀 「陸奥南部における古墳時代の終末」『国立歴史民俗博物館研究報告第44集』 1992



第12図 安久東道路遺構全体図

写 真 図 版



写真1 安久東遺跡航空写真（昭和36年、国土地理院撮影）



写真2 調査区西壁セクション（1～5層、東から）



写真3 調査区西壁セクション（SK1、東から）



写真4 深振区東壁セクション (12~23層、西から)



写真5 調査風景 (南から)



写真6 調査風景（南東から）



写真7 調査風景（北から）



写真8 調査区全景（東から）



写真9 碓層上面の状況（北から）

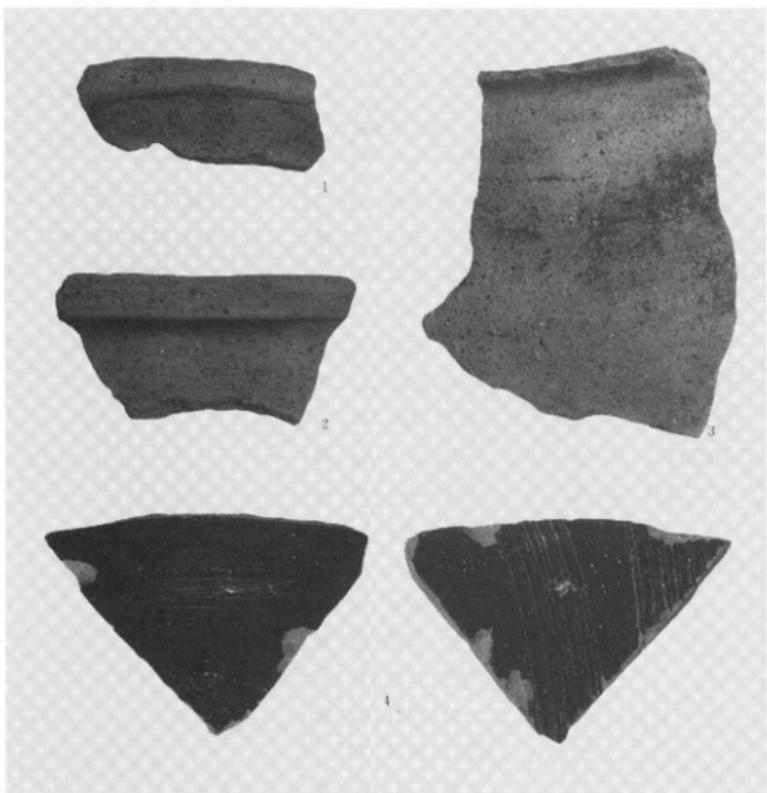


写真10 出土遺物

文化財課職員録

課長 白鳥 良一

管 理 係	調査第一係	調査第二係
係 長 菅原 澄雄	係 長 加藤 正範	係 長 田中 則和
主 任 村上 道子	主 任 結城 憲一	教 諭 太田 昭夫
主 事 佐藤 正幸	教 諭 佐藤 好一	主 事 佐藤 甲二
主 事 高橋 三也	主 任 篠原 信彦	主 事 渡部 弘美
主 事 庄子 厚	主 任 木村 浩二	主 事 斎野 裕彦
主 事 佐藤 寿江	主 任 佐藤 洋	主 事 荒井 格
	主 事 古岡 恒平	主 事 中富 洋
	主 事 金森 安孝	主 事 平間 亮輔
	教 諭 小川 淳一	教 諭 五十嵐康洋
	主 事 工藤 哲司	教 諭 菅原 裕樹
	主 事 主浜 光朗	主 事 渡部 紀
	主 事 長島 采一	教 諭 熊谷 裕行
	主 事 工藤信一郎	
	教 諭 神成 浩志	
	教 諭 竹田 幸司	
	教 諭 稲葉 俊一	
	主 事 佐藤 淳	
	教 諭 川名 秀一	

仙台市文化財調査報告書第174集

安久東遺跡

——第3次発掘調査報告書——

1993年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区国分町3-7-1
仙台市教育委員会文化財課

印刷(株)東北プリント

仙台市青葉区立町24-24 TEL 263-1166

